

フェミニズム運動の歴史とトニ・モリスンの言説から考える

ジェンダーと人種

森 あおい

1. はじめに

1920年にアメリカ合衆国で憲法修正第19条が成立し、女性選挙権が認められてから今年(2020)で100周年を迎える。女性選挙権獲得は、セネカフォールズ会議(1848)を契機に始まった女性権利拡張運動の主目的であり、憲法修正第19条の成立は、この運動が一定の成果を収めたことを意味している。しかしフェミニズム運動の歴史を丁寧に紐解くと、この運動から黒人女性が排除されていたことがわかる。憲法修正第19条は、人種に関係なくすべての女性の選挙権を認めていたが、特に南部では様々な制約が加えられ、黒人は男性、女性とも選挙権を奪われていた。本発表では、フェミニズム運動の歴史と黒人の関わりを俯瞰した上で、アメリカの法制度から取りこぼされた人々の主体性回復のプロセスを、トニ・モリスンの言説を基にジェンダーや人種の観点から検証する。

2. 第一波フェミニズム運動と人種問題

第一波フェミニズム運動の中心となったスーザン・B・アンソニーとマティルダ・J・ゲージが著わした大著、『女性参政権の歴史』で言及される黒人女性の名前は、サジャーナ・トゥルーただけである。しかもトゥルースの評価について、昨今の研究では白人が彼女のイメージを利用したことも指摘されている。

トゥルースは、1851年にオハイオ州アクロンで開催された女性会議で行った演説「私は女じゃないのかい」で有名である。この演説で、男性と同様に過酷な肉体労働を強いられ酷使された結果、男性に引けを取らない筋力を持つトゥルースは、右手を肩までむき出しにして、逞しい筋肉を聴衆に見せつけ、自らの身体を証拠として提示し、「女性は男性より体力が劣っており、か弱い存在で、男性に庇護されるべきである」という男性優位の概念が無効であることを証明した。

しかしネル・ペインターによれば、トゥルースの演説は、当初は殆ど取り上げられることはなかったという。この演説が一般に広く知られるようになったのは、演説から12年後の1863年に当時ラディカル・フェミニストとして知られていたフランシス・ダナ・ゲージが、彼女を評価するエッセイを発表してからのことで、しかも「私は女じゃないのかい」というタイトルもゲージがつけたものであった。サジョナー・トゥルースは、今でこそ人種・ジェンダーの問題に取り組んだ活動家として知られているが、最初から正当な評価を受けていたわけではなかった。また、ターボグ・ペンは、奴隷制時代からトゥルース以外にも一定数の黒人女性が女性権利拡張運動に関わっていたことを指摘しているが、これらの女性は白人女性の「友人」と呼ばれることはあっても、公の記録に名前が残されることは殆どなかった。トゥルース一人だけが黒人女性活動家すべてを代表する存在として扱われ、個々の活動家の多様性は看過されていた。

1913年3月3日に全米婦人参政権協会によって計画された、ワシントンDCで繰り広げられた女性参政権を求めるパレードは、国際的な参政権論者や芸術家が多数参加し、ドイツの女優ヘドヴィッヒ・ライヒャーが、アメリカの女神、コロンビアの衣装を纏って行進したこともあり、メディアでも大きく報じられ世間の注目を集めた。その一方で、ジェームズ・ブリス等が指摘するように、この女性選挙権を求める運動は人種隔離されていたという。議会図書館発行の資料によれば、パレードを組織したメンバーの一人アリス・ポールは、南部の白人女性の支持を失うことを恐れて黒人の参加を思い留まらせようとした。ポールは、黒人女性がどうしても参加を望むのであれば、列の後ろで行進するように指示したが、この差別的方針に抗議するために、アイダ・B.ウェルズのように列の後ろに下がることを拒否し、あえて白人女性と一緒に行進に参加した黒人女性もいた。女性の権利を求める運動は、人種主義と闘う運動でもあった。

3. 『ジャズ』に見る1920年代のジェンダーと人種

モリスンの『ジャズ』は、1920年代のハーレムを想起させる都市を背景に南部のヴァージニアから北部の都市へと移住してきた夫婦ジョーとヴァイオレット、そしてジョーが関係を持つドーカスという少女を中心に展開される。ちょうど、憲法修正第19条が成立した時代と重なるが、この作品に登場する黒人女性には、ジェンダーよりも人種のほうが大きな足枷になっていた。彼女たちにとって、就労は選択肢ではなく生きるために必須であった。ヴァイオレットは、結婚前はヴァージニアの農場で綿花摘みの仕事に明け暮れ、僅かな給料を

得るが、所詮は白人に搾取されている。結婚後は、無許可で美容師として家で客を取り家計の足しにしている。ドーカスの叔母のアリスは、1917年にイーストセントルイスで起きた人種暴動で、ドーカスの母である妹とその夫を失い、姪のドーカスを引き取り、お針子として働きながら妹の忘れ形見を養っている。またドーカスの友人フェリスの母親は、白人の家で住み込みのメイドとして働き、娘と過ごす時間は殆どなかった。彼女たちは、食い扶持を稼ぐために日々必死に働いており、女性権利拡張運動に関わることもなかった。

黒人女性にとっては、人種隔離の壁を乗り越えて仕事につくことが大きな関心事だった。『ジャズ』の冒頭で、「都市に夢中」になっている語り手は、ベルビュー病院の黒人看護師について以下のように述べる。「一期生の黒人看護師の髪の毛は、公式なベルビュー病院のナース・キャップにはふさわしくないと言われたが、今や35名が仕事に専念し、素晴らしい働きをしている」(16)。ベルビュー病院はハーレムに実際に存在した病院である。そこで黒人の看護師が初めて採用されたのは1921年5月で、当初は6名しかいなかったことが『ニューヨーク・エイジ』に掲載された記事「黒人の看護師に門戸を開くベルビュー」(1921.5.28)で報じられている。「シティ」に暮らす人々にとっては、女性選挙権獲得以上に、人種差別撤廃のほうが喫緊の課題だったと言える。

4. 「おわりに」に代えて—芸術の可能性

モリスンは、政治的権利を奪われていた黒人の存在を芸術の力を用いて回復しようと試みている。『ジャズ』の本文には、ジャズという言葉は一度も使われていないが、ジャズを彷彿とさせる音楽は作品の随所にちりばめられている。たとえば、「シティ」の通りから時折聞こえるトランペットやピアノ、ドラムの音、黒人のブルース等、不可視ではあるが「音」を通して「シティ」に暮らす人々の存在を浮き彫りにし、作品の骨格を支えている。また、1992年に出版されたペーパーバック版の『ジャズ』の表紙には、オーミアリーが指摘するようにロメール・ビアデンのコラージュ「ブルースに関して—サヴォイにて」(1974)が用いられている。キャンベルの伝記に詳述されているように、ビアデンは数多くの名作を残した芸術家であるが、公民権運動以前の白人中心的なニューヨークの芸術界では人種差別と闘うことを余儀なくされた。モリスンは、そのような芸術家の作品を表紙に用いることで、黒人が置かれてきた政治的不平等に対する異議申し立てを行っていると考えられる。モリスンは、エッセイ「富の対価、気配りの対価」において、芸術を通して「民衆とともに様々な分野において会話をすることが、深く他者のことを気遣い、そして全うな人間であることが何を意味しているのか」ということを理解するために重要なのです(53)と述べている。モリスンは、ジェンダーや人種問題等の二項対立的な分裂を避けるための議論が可能となるスペースを、文学も含めた包括的な芸術の領域で構築しようとしたと言えるだろう。

引用文献

- Bliss, James. "Black Feminism Out of Place." *Signs: Journal of Women in Culture and Society* vol. 41, 2016, pp. 727-749. JSTOR, <https://doi.org/10.1086/685477>.
- Campbell, Mary Schmidt. *An American Odyssey: The Life and Work of Romare Bearden*. New York: Oxford UP, 2018.
- Library of Congress. *Shall Not Be Denied: Women Fight For the Vote*. New Brunswick: Rutgers UP, 2019.
- Morrison, Toni. *Jazz*. New York: Knopf, 1992.
- . "The Price of Wealth, the Cost of Care." *The Source of Self-Regard*. New York, Knopf, 2019, pp. 49-53.
- O'Meally, Robert G. "'We Used to Say Stashed': Romare Bearden Paints the Blues." *Studies in the History of Art*, vol. 71, 2011, pp. 59-87. JSTOR, www.jstor.org/stable/42622533.
- Painter, Nell Irvin. "Sojourner Truth's Carte De Visite." *Women's America: Refocusing the Past*, edited by Linda K. Kerber and Jane Sherron De Hart. New York: Oxford UP, 2011.
- Terborg-Penn, Rosalyn. *African American Women in the Struggle for the Vote, 1850-1920 (Blacks in the Diaspora)*. Bloomington: Indiana UP, 1998.